

男子三日会はかつもくざれば刮目して見よ：日々努力を続ける若者は、3日も経つと見違えるほど成長しているものだから、刮目して（目をこすって）見なければならぬ。

価値ある1敗

若者は日々少しずつ成長している。しかし、その成長が目に見える形となって表に出るのは“突然”である場合が多い。

春季大会、ダブルス1回戦。深西ペアはそこそこのストローク力。高屋敷・立花が苦戦することは容易に予測できた。試合展開はほぼ互角。しかし、高屋敷・立花のメンタリティは理想的だった。2人の声からは溢れるほどの気迫が伝わってきたし、諦めずにボールを追いかける姿は頼もしくさえあった。それでいて、驚くほど落ち着いていて、無理な強打をせず、しかし前衛では積極的にポーチに飛び出した。

3-3の後にゲームが動いた。高屋敷・立花が2ゲームを連取して5-3としたのだ。「このゲーム、絶対取るぞ！」立花の声が響く。第9ゲーム、深西のサービスゲームは0-40となり、マッチポイントを迎えていた。「よーし、締めるぞ！これ1本で決めるぞ！」再び立花の声。勝利は、ほとんど手の中にあっただけで・・・しかし、5-3の triple match point から4ゲームを連取されての逆転負け。うな垂れる2人の背中が寂しかった。

「このゲーム、絶対取るぞ！」の心意気は見上げたものだ。しかしどうだろう。試合内容はほぼ互角だった。両者とは関係のない第3者の目から見れば、第9ゲームはどちらが取っても不思議ではない試合展開だったのだ。ということは、高屋敷・立花が6-3で勝利するか、5-4の大接戦にもつれ込むかは五分五分の確率と考えることが出来る。

第9ゲームを、50%の確率で高屋敷・立花が取った場合、試合はそれで終わり、何の問題も起こらない。しかし、50%の確率で深西がキープした場合、続く5-4の第10ゲームが始まる。「このゲーム（第9ゲーム）を絶対に取らなければならない」と意気込んでコートに立っていた高屋敷・立花にとっては、出来ればやりたくなかった第10ゲームが始まってしまうのだ。一方、剣が峰を堪えて、やっと4-5 down に挽回した深西ペアにしてみれば、やりたくて仕方なかった第10ゲームが始まる。互角の力を持っている「やりたい人」と「やりたくない人」が試合をすれば、「やりたい人」が有利になるのは当然のことである。事実、5-4 up に迫いつかれた高屋敷・立花は、リードしているにもかかわらず、追い詰められた気持ちになっていたに違いない。4-5 down なら「絶対取るぞ！」の危機感は不可欠である。しかし、5-3 up、5-4 up、6-5 up などのとき、「絶対取るぞ！」という言葉は「もうこれ以上やりたくない」という逃げ口上と同じ意味を持って、自らを追い詰めことになる。「少しだけ優勢」という冷静な分析と、タイブレークまで楽しむ心の余裕・・・まあ、言うだけなら簡単なのだが・・・。

慰めるつもりは無い。2人と同じように私も悔しかった。しかし、強くなった。見ていて嬉しくなった。そして、仮に高屋敷・立花が第9ゲームをブレイクしていれば6-3で勝利することができたのだ。しかし、それでは2人は何も学ばなかったに違いない。